



「フアジー理論」で二世を風靡した。一九八六年、人間らしいあいまいな判断をするフアジーコンピューターを世界で初めて製作。機械があいまいな概念を理解できるようになった。かまどの微妙な火加減を再現する炊飯器」などのフアジー製品が流行。八八年に西日本文化賞を受け、九〇年の流行語にも選ばれた。そのフアジー理論が今、

難治性てんかん新治療法開発に取り組む
九州工業大大学院特任教授 やまかわ たけし
山川 烈 さん



薬物治療が難しい「難治性てんかん」の新治療法開発に生かされている。まひが起きる恐れもある。けいれんや意識喪失などの発作が起きるてんかん患者は、疲労が難しく、入浴にも命の危険が伴う。薬が効かない場合、頭蓋骨を切り開き、原因と思われる脳の部分を数ミル、切除している。言語障害や運動機能

「知人から実は私の家族もと言われた。外出もできず、悩みを抱えている人を救いたい」。患者と家族の切実な声も聞き、強い使命感に燃えている。今春、九州工業大大学院・生命体工学研究所(北九州市)教授を退官し、現在は特任教授。福岡県飯塚市在住。六十三歳。(北九州支社・野津原広中)

フアジー理論と神経科学などを融合、発展させた情報処理技術「ソフトコンピューティング」が役立つと期待されている。山口大医学部静岡大工学部の研究グループとの共同研究で、二〇一一年度完成が目標だ。